

国体選手第一号の勲章

— 岩中水泳部の思い出 —

吉田 大三 (旧12回生)

私の岩手中学時代 (旧制) は、日中戦争が始まった昭和一二年 (1937) から日米開戦 (1942) の、もう半世紀あまりも前の遠い昔のことだが、その頃はあたかもわが国にとつて歴史的な激動期にあたり、それだけに心に残る思い出も多い。

当時は、戦時体制下の、いわゆる軍国教育をうけたわけだが、格別きびしいと思つたこととはなく、軍事教練をはじめは兵隊ゴツコの延長ぐらいいしか思つていなかった。まして、軍国主義によつて自由思想がきびしく弾圧されてきていることなどは、まだまだ中学生の私には実感として乏しく、きわめて安穩な毎日をおくつていた。ところが、いよいよ、上級生になつて、第二次世界大戦勃発の風雲急を告げる事態がきて、はじめて、自分はこれからどうすればいいのだと、やつと周囲の環境のきびしさを知つたのだから、戦時学徒としてはなんとも情けない中学生だつたといわざるを得ない。

これは自分の自覚の足らなさもさることながら、岩手中学という得がたい温床のなかに

ぬくぬくと暮らしていたせいであるとも思う。それほど、他の公立校にくらべると私学なるがゆえの自由があつたことはたしかであろう。学校自体が積極的に時局に迎合する姿勢をもたなかつたことは、当時としてはどう批判されようとも、生徒にはありがたいことだつた。

さて、私にとつて、わが岩中時代の思い出は、なんといつてもクラブ活動につきる。教室でお世話になつた多くの先生がたには、はなはだ申し訳ないが、スポーツに打ち込んだ汗と涙の記憶は、どんなものよりも強烈である。

私は、健康な少年なら誰でもそうであるように、勉強よりも運動のほうが好きだつた。とりわけ、幼いころから水あそびに親しんできたので、いつかは正式のプールで泳ぎたいという願ひをもつていて、それが叶えられるのをなによりも楽しみにしていたが、はじめから、希望通り水泳部に入ることはできなかった。

それには理由があつた。私はどういうわけか、入学当初成績がよくて、学校では優等生

のなかに入れられ、運動部に入ることをめられていたのである。いまでは考えられないことだが、当時は病弱な者と、学業成績優秀な者は、運動部には入つてはいけないという決り (きまり) みたいなものがあつた。たしかに運動に熱中するあまり「健康な劣等生」になる例が多かつたから、好んでその仲間入りをしてせつかくの評価を落とすこともなからうという担任の先生の配慮だつた。とくに水泳部は、先生にいわせると、不良生徒の集まりということなつていた。

しかし、水泳への思い断ちがたい私は、意志が強いのか、弱いのかわからないが、いつまでも先生の顔をうかがつてゴマするよりはと、「不健康な優等生」よりも「健康な劣等生」の道を選んで水泳部に飛び込んだのである。こうなると先生の思惑などはどうでもよかつた。こうして私と水泳部とのむすびつきができたというわけである。

毎日の練習は思つた以上に楽しかつた。仲間にはたしかに優等生はいなかつたが、先生のいうような問題児もいないし、みな気のいい連中ばかりである。底抜けに明るく、文字通り裸でつきあう水泳部の雰囲気にもすぐとけこみ、運動部といえは、すぐビンタがとんでくるような恐いところだといひままでの偏見が恥ずかしいくらいだつた。とにかく、

練習がづらいなどとはすこしも思わず、好きな水泳ができるだけで嬉しく、こんな楽しい世界ははじめてだった。私は水泳選手の仲間入りができた嬉しさに有頂天になっていた。

当時、岩中水泳部は、栃内松四郎主将（元県議）のもとに、昔のままのリベラルな気風で、練習はすべて選手の自主性にまかせていた。つまり、勝手気ままに泳いでいたということになるが、そんなやりかたで強くなれるわけはなく、それまでの大会では予選落ちが当たり前で、実績はほとんどゼロに近かった。

三年生のシーズンになって、私にとって初陣となった県大会の百米自由形で、予選ながら一着となった。一着のコールを聞いたのは、おそらく岩中水泳部にとってはこれがはじめてだったろう。決勝では五位だったが、自由形短距離といえば水泳競技の花形種目である。各チームの強豪が顔を揃えているなかで、とにかくにも決勝進出は、大きな自信になった。この大会では同僚の大沢一郎君（故人）が背泳決勝で、堂々二着に入り、二名が決勝進出をはたしたのは岩中水泳部にとって前代未聞のことだった。翌日、学校の掲示板に貼りだされ、新聞にも自分の名前が載ったときは、もう勉強などはどうでもよかった。あのとときの感激はいまでも新鮮である。

これがかっかけとなり、水泳部全体に勝つ

ことへの執念みたいなものが生まれ、来シーズンに向けて期待が大きくふくらんできたことはたしかである。

ちょうどこの年の秋には、六九連勝中の無敵横綱双葉山が敗れて日本中がひっくり返るような騒ぎになったのを、雑音だらけのラジオで聞いたのも懐かしい思い出である。

翌年、やがて、大地を閉ざしていた雪も融けて、ようやく盛岡にも春の気配が感じられるようになる、陸にあがったカツパたちは、もうじつとしていられなくなってくる。

水泳部の練習は、高松池の桜並木がやっと蕾をつけた頃、湖畔を走ることからはじまり、日を追って、桜の蕾がだんだんふくらんで色づいてくるのを走りながら、見るのが楽しみだった。

満開の桜で賑わった高松池も、五月にはいると、急に静かになり、まわりの丘が眼にも鮮やかな青葉に変る。いよいよ待ちに待ったシーズンの到来だ。各校の水泳部は一斉に高松池めぐりしてやってくる。それぞれ湖畔の一角を占拠して、そこから湖心までコースを想定して何往復もするのだが、まだ水温は二〇度にもならないからそう長くは泳げない。唇を真っ青にしてあがってくると下級生が焚火をして待っていてくれる。気温は水温よりまだ低いから大急ぎで体を拭いて暖をとらねば



水泳部のメンバー（昭和16年）

ならない。寒い寒いといいながらもみんな好きな泳ぎができることが嬉しかった。

焚火をするにしても燃えるものがそのへんころがっているわけではないから、近くの林から枯れ木を拾い集めたり、ときには近所の農家の裏庭に積んである薪をかついできて追いかけられたりもした。また、飛び火が危ないからと学校に苦情がはいったこともあったが、なんといわれてもやめるわけにはゆかず、ただ泳ぎたい一心で高松池に通ったものである。

六月の中旬、城南小学校のプールがオーブ

ンすると、いよいよ待ちに待ったわれわれの正規の練習がはじまる。満々と水が湛えられた初夏の太陽に輝くプールはカップ連中の眼にはまるで天国のようにも見えた。

当時は、各自で自分の練習メニューを作った。私は水泳選手のバイブルとされていた斉藤儀洋の指導書にしたがって練習プランを立てていた。その頃の水泳理論はいまとは違って、「足7、手3」、つまり脚力が重視され、体のローリングは絶対禁忌、自由形の場合、ハワイで完成したカハナモク泳法という上半身をボートのようにきちんと固定して、膝から下をスクルー代わりに動かして推進力をつける、いわば小型モーターボート形が理想とされ、「ターザン映画」で有名になったオリンピックチャンピオン、ワイズ・ミュラーがその典型だった。したがって、バタ足練習に重点をおいて練習を積んだ。練習が終わるころはもうあたりは薄暗くなり、家に帰って、夕飯を腹いっぱい詰め込むと、勉強どころではなく、疲れて寝るだけである。世の中のかなかながら起きているかも、まったく無関心で、いまにして思えばよき時代のなんと健康な毎日だったろう。

日中戦争は中国全土に拡大し、戦局は長期化の様相を呈し、戦時色ますます濃厚となるなかで、軍事体制の規制がますますきびしく

なっていた頃である。

この年、わが岩中水泳部は、新人村井莊平君、寛良夫君（ともに故人）らの活躍もあり、ついに宿願の県大会に優勝するという快挙を達成し、その後戦後の黄金時代の基礎をつくることができた。当然のことながら、それまで学校のなかでは落ちこぼれ集団とみられていた水泳部のステータスが急上昇したことはいうまでもない。

この年、昭和一五年は、日本建国二六〇〇年の記念すべき年にもあたり、四年前、世界に向けてめざましい国威宣揚を示したドイツのベルリンオリンピックにあやかって、わが国は軍官民をあげて、東京にオリンピックを誘致することに成功したのであるが、開催直前になって、世界情勢悪化の理由で、残念にも第一二回オリンピックは中止のやむなきにいたった。

そのために、オリンピックにむけて準備された多くの施設と、選手育成に指導をつづけてきた各種スポーツ団体のエネルギーを、そのまま国内大会に切り替えて、誕生したのが文部省主催の「国民体育大会」である。

これが現在も続いている「国体」で、はじめのころ正式には「明治神宮国民錬成大会」と称した。明治神宮の名を冠したのは全国規模の大会は必ず首都東京の明治神宮外苑競技場で

行なわれていたからであろう。したがって、いまでは「国体」とか「国体選手」が通り名だが、当時一般には「神宮大会」とか「神宮選手」とよばれていた。

この年のシーズンは、時局柄（当時は都合よく使われた言葉である）全日本水泳選手権大会はじめインターミドル、インターカレッジ大会はすべて取り止め、全国規模の大会は「神宮大会」一本にしほられ、水泳競技の部は、他の競技にさきだつて九月下旬に神宮プールでおこなわれることになった。

スポーツ選手にとって、地域代表として全国大会に出ることが大いなる荣誉であり、目標でもあることは今も昔も変わりはない。全国球児が甲子園に憧れると同じく、われわれ水泳選手にとっては先輩たちが次々世界記録を樹立した神宮プールで泳ぐことが究極の夢だった。

いよいよ来るべき日がきて、神宮大会県代表選手の選考で、岩中から自由形の私と、背泳の大沢一郎君と二人が選ばれたことが、学校を通じて知らされたときは、もう天にも昇る思いだった。いまにして思えばあの時の喜びはわが生涯最高の感激シーンだったかも知れない。

こうして神宮プールの晴舞台上に乗り込んだ県代表選手団が、東京に着いてまず驚いたの

は、宿舎にあてられた神宮外苑の日本青年館の建物の大ききだった。おのぼりさんの眼には、さすが東京は大都会である。街にはちんちん電車が走り、大きなビルが並んでいる。見るもの聞くものすべてがキラキラ輝いていた。時局柄いたるところ「奉祝紀元二千六百年」、「八紘一宇」、「皇軍万歳」などの垂幕やポスターが貼りだされ、のんびりした盛岡の町とはなにもかも大違いだっただ。

外苑の一角にある高いスタンドにかこまれた憧れの神宮プールは、さすがわが国の水上競技のメッカだけに圧倒されるような重みを感じ、選手の一人として、ここで泳ぐ自分の存在がまるでちっぽけなものしか見えなかった。

いよいよ開会式当日は、参加全選手そろって明治神宮の社前に詣で、内苑から玉砂利を踏んで整然と外苑の会場まで行進した。プールのメインスタンドには三笠宮殿下はじめ、礼装の陸海軍武官が綺羅星のごとくならび、あたかもわれわれがここから戦場に出陣するかのようなものらしい雰囲気で行なわれたことを憶えている。当時一般の礼装はカーキ色の詰衿と軍用戦闘帽、(国民服と国民帽と称した)、学生はもちろん学生服に制帽、いずれもゲートル着用だった。現在のようなかラフルなトレパン姿の郷土色豊かな

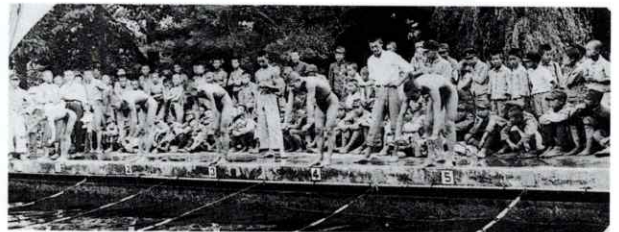
国体開会式をみていると、当時のことは遠い夢の彼方である。

競技は「産業人」、「大学生」、「中学生」の三部にわけられ、いまのように都道府県対抗ではなく、予選なしのタイムレースで、しかも成績発表も表彰もないというものである。あくまでも勝ち負けは二の次で、全国から若者たちが集まって、大いに氣勢を挙げ、国民の士気を昂揚することが目的だという。これでは「水泳競技大会」ではなく「全国水泳祭」といったほうがあたるだろう。予め聞かされていなかったから、拍子ぬけも甚だしい。おそらく他の選手たちも同じだったと思う。

あとで聞けば、一億国民が一致団結してアジアの盟主た然とするとき、スポーツとはいえ同胞が勝敗を競うことは天皇の民心の願うところではないとの理由だった、いまではとても考えられないが、これがなによりも最優先する時代だった。

おのぼりさんには東京見物も楽しみの一つだが、残念だが外出は一切許されない。宿舎日本青年館の屋上から東京の街を眺めるだけだった。ここで持参のカメラで記念撮影をしたら、当番の憲兵に咎められ、屋上は撮影禁止だからと名前を聞かれフィルムを抜き取られるというとんだハブニングもあった。

胸をふくらませ、期待をもって臨んだ神宮



盛大な校内行事水泳大会 (昭和16年)

大会は、こうしてあっけなく終わった。神宮大会がすむと、盛岡は秋から冬が駆け足でやってきて、水泳は完全にシーズンオフにはいる。

そのころは戦時色がますます濃くなり、もうスポーツどころでなく、運動部はいずれも休部同然だった。去年の今ごろのことを思うと、わずか一年で時代は大きく変換し、その翌年わが国はついに世紀の第二次世界大戦に突入したのである。

こうして私自身の水泳生活も事実上終わりをつけた。

この年はじまった国体には、陸上競技など

の秋季大会にも、岩手中学から数名の選手が選ばれたが、夏季大会に出場した私は、図らずも「岩手中学第一号国体選手」の栄誉をいただくことになった。これは自分としてはわが生涯の数少ない勲章の一つである。

「石桜七〇年誌」刊行にあたり、在学当時の岩手中学について、記念行事のことや、恩師の思い出などを書くべきだろうが、水泳部の昔話だけになってしまい、いささか忸怩たる思いだが、私にとってはこれがすべてである。

るからお許しねがいたい。
最後に、岩手中・高のさらなる発展を願ひ、水泳部OBですでに故人となった仲間たちに心から哀悼の意を表して、稿をとじる次第である。